

# 明治時代の長野県における悪癖（問題行動）を示す児童への教育に関する史的研究（2）

－よく泣く児童の指導について－

中 嶋 忍\*・河 合 康\*\*

（令和3年1月26日受付；令和3年4月23日受理）

## 要 旨

本研究は、明治30年代の長野県の通常教育における悪癖を示す児童の実態と指導実践を明らかにする目的で、北澤大吉の『悪癖児童矯正實驗談（續）』を基に、1. 悪癖のある児童の実情と周囲の反応、2. 悪癖の改善指導、3. 悪癖と学力、に焦点を当てて、よく泣いてしまう児童の指導方法について検討した。その結果、次の点が明らかとなった。(1)対象児は、様々な理由で泣くことが多いという悪癖があったこと。(2)対象児は、自分の思い通りに行かなかった時に手がつけられないほど泣いて、小学校を無断で帰宅してしまったこと。(3)周囲は、可能な限り泣かせないようにしたこと。(4)よく泣く要因としては、保護者が子ども同士の喧嘩などに口を出したり、家庭内では子どもに甘えさせるなどといった不完全なしつけがあったこと。(5)1回目の指導では、保護者に無断帰宅したら必ず学校まで連れて来てもらうように依頼したが、兄弟や親戚が付き添いで来たために、悪癖が改善されなかったこと。(6)保護者は、自分の子どもだけが問題があると言われることに納得がいかない状態であったこと。(7)保護者は納得していなかったが、他の児童などに影響があると説得され、指導に同意したこと。(8)2回目の指導では、対象児に教科の成績が良いと自信を持たせ、無断帰宅したら父親に連れて来てもらうように告げて丁寧に指導を行った結果、悪癖の改善が見られたこと。

## KEY WORDS

長野県 Nagano Prefecture 悪癖 bad habits よく泣く子 children who cried frequently  
明治時代 Meiji Era

## 1 問題の所在と目的・方法

日本における近代教育の始まりは、江戸時代から明治時代が変わって間もない1872（明治5）年のことであった。江戸時代までの教育は、幕府と一つ一つの藩の関係が強く各藩がそれぞれ独立していたことから、藩独自の教育政策を行っていた。これは、藩の財政力によって教育にかかる費用が増減したり、藩内の産業の有無によって住民の所得の違うことが子どもに教育を受けさせる意欲に違いをもたらした。このように封建体制下では、日本人として共通した知識や考え方を育てることが難しかった。この後江戸幕府は、日本を欧米と同様に開かれた国にしたいという開国派に倒された。その後開国派は、明治に改元して新政府を樹立した。これにより日本は、全国を共通の法律で治める法治国家を目指した。一方、日本は1853（嘉永6）年のペリー来航をはじめとして、海外の国力を知ることになった。これに脅威を感じた日本は、諸外国と立ち向かうために近代的な軍隊を整備する必要性を感じた。それには国民の意識を高めることが重要であり、全国共通の教育制度の確立が急がれた。これが1872（明治5）年の学制の制定と関係があった。

学制は、小学校教育のために入学及び卒業する年齢を定めた。また保護者に対しては、この範囲の年齢の子どもを就学させることを義務とした。この制度に先駆けて旧・筑摩県<sup>1)</sup>では、学制発布よりも少し早い同年2月に『学校創立告諭書』を発表した。これは、当時県の参与（後に権令となる）であった永山盛輝が中心となって考案された。この政策は、山深い地から多くの優秀な人材を輩出させる目的で、これを達成させるために小学校創設を促し、「教育立県」の基礎となった。そして現在の長野県が誕生した後も政策が引き継がれた。

このように各地で小学校が建てられて学齢児が多く就学すると、様々な子どもの存在が明らかになり、学力の問題が生じた。その根底には、子どもの身体的・精神的なことはもちろん、家庭状況や不良行為の問題と多岐にわたっていた。この問題に立ち向かった長野県の現場の教育関係者は、信濃教育会<sup>2)</sup>の機関誌<sup>3)</sup>で研究や教育実践を発表した。

特に学力が要因の劣等児は、理解の度合いの差などで一斉授業や指導を行う際に様々な問題が生じた。これらの

\*無所属 \*\*臨床・健康教育学系

劣等児を減少させようとしたのは、松本尋常小学校の学力別学級編制である（中嶋・河合，2006）<sup>(1)</sup>。これは、1890（明治23）年に学級内の児童の学力を均等にした級内学力均等法で編制されたものであった。しかしこの編制法は、4年間で幕を下ろすことになった。それは学力の差違があるにもかかわらず、学年内の授業の内容・進度や試験などを統一したものにしていたことが要因であった（中嶋・河合，2018）<sup>(2)</sup>。またこの時点では、児童の疾病や不法行為をするなどといった問題を加味していなかった。

その後劣等児対策は長野県内で研究が進み、関連分野の見解を基に教育実践が行われ始めた。その中でも長野県北安曇郡<sup>(4)</sup>の小学校教員の北澤大吉は、児童の悪癖を改善した実践報告を1904（明治37）年に発表した。北澤は、現在の場面緘黙症と考えられる「教場唾」<sup>(3)</sup>と何かあるとすぐに泣き出す「よく泣く」児童を悪癖として考えた。

本研究は、明治30年代の長野県での通常教育における悪癖を示す児童の実態と指導実践を明らかにすることを目的とした。具体的には、よく泣く児童の行動の状態と改善への指導方法を探るために、信濃教育會雑誌に掲載された北澤大吉の『悪癖児童矯正實驗談（續）』<sup>(4)</sup>を基に、1. 悪癖のある児童の実情と周囲の反応、2. 悪癖の改善指導、3. 悪癖と学力、に焦点を当てて検討した。また本研究は障害児教育の歴史研究であり、現在の社会的背景や教育理念などとは違うため、当時の考え方や用語については原語を用いた。

本文中の引用史料については、次のように表記した。史料中の漢字及び文字は原文どおり旧字体を用いたが、一部については常用漢字などにした。また史料中の「◆」については、判断不能などの文字を表したものである。史料の引用部には、引用ページを付記した。

## 2 悪癖のある児童の実情と周囲の反応

北澤は前号の教場唾に続き、「予ガ嘗テ受持テル生徒ニヨク泣ク子アリ」（北澤[1904b]15）と示しているように、以前に受け持っていた児童によく泣く者がいたとしている。北澤は、この児童の状態について「他生ニ何か少シ氣ニカ、ルコトヲ言ハル、アレバ忽チ泣キ出シ又戯レテ自分ヨリ他生ニ手出シヲナシ或ハ惡口ヲ云ヒ逐ハル、ヲ臂ニテモ捕ヘラル、カ若クハ惡口ヲ云ヒ返サルレバ泣ク」（北澤[1904b]15-16）と記している。この泣き出すのは、次の状態の時であったと指摘している。1つは、周囲の児童に気になることを言われた時に泣くことである。もう1つは、対象児が遊びの中で他児童に手を出したり、悪口を言って捕まえられたり、悪口を言い返されたりした時に泣くことである。北澤はこれらの例として、「休ミ時間ニ圍爐ノ際ニアリテ自分（「ガ」が脱落か？）思フ存分ニ暖ヲ採ル能ハザレバ泣ク木蔭ノ石ノ上ニ自由ニ涼ミスル能ハザルモ泣ク」（北澤[1904b]16）と記していて、火鉢などの暖房器具で十分に暖まらない時や、木蔭で思ったように涼めない時に泣き出すとしている。対象児の泣く状態について北澤は、「其泣クヤ一日中ニ三回ヲ下ラズ學校ニテモ泣カザルノ日少シ其泣クヤ泣聲高ク近隣（家ノマバラナル場所ニ於テ）二三十戸位ハ聞コユ」（北澤[1904b]16）と指摘している。1つ目は、1日に3回くらいは泣いて小学校においても泣かないことが少ない状態である。2つ目は、泣き声が高くて、人家が少ない地区で20～30戸の家に響き渡るくらい大きさである。北澤は、泣き出した後について「之ヲ誰ニテモ（父母ノ外）慰メナダメントスレバ却テ泣聲ヲ烈シクシ若シ手ヲトリ連レ行クカ又ハ教室ニ入ラシムレバ恰モ普通ノ民家嚴ナル家庭ニ於テ行爲不良ノ子供ヲ部屋若クハ土藏ニ入レ苛酷ナル叱責ヲスルルノ如ク絶叫シテ救ヲ求ムルカ如ク其實際ヲ見ズシテ泣聲ノミヲ聞カバ如何ニ嚴酷ナル呵責ヲナスナランカノ如ク」（北澤[1904b]16）と示している。これは、保護者以外の者がなだめようとするとかえって激しく泣き出してしまおうとしている。北澤は、例えば泣いている対象児を教室内に入れた時に次のような状態になると指摘している。それは、まるで悪いことをした子どもを部屋や土藏に入れて叱責する時のような泣き声をする。したがってこの泣き声だけを聞くと、ひどく厳しい叱責（あるいは体罰）を加えているのではないかという疑いを持たれてしまうと述べている。このような状態から北澤は、「大泣騒ヲナスヲ以テ其ノ泣キ出スニ當リテハ教室ニ入ルコトモ家ニ連レ行クヲモナス能ハズ其マ、構ハズ置クヨリ外致シ方ナシ」（北澤[1904b]16）と記していて、一度泣き出すとどうすることもできずにいると指摘している。北澤は具体的に、「放置スレバ一時間又ハ以上モ泣キ居リ終ニハ泣キナガラ家ニ皈ル其泣キタルアト疳癰ノ強キ故カ涙涎ト鼻汁一所ニ多クゴタへ出シテ汚スヲ甚シ最モ平生着物ノ如キハ涎ト鼻汁トヲ出ス甚（「ダ」が脱落か？）シキト品性（「ガ」が脱落か？）良カラザル」（北澤[1904b]16）と示しているように、そのままにしておくと1時間かそれ以上泣き続けて帰宅すると甘えが強くなって、涙・よだれ・鼻水と一緒に着ている物が汚れて身だしなみが良くないと述べている。更に着ている物については、「家庭モ大ニイキナリ（涎ハ遺傳）常ニ胸襟以下ピカ／＼カンパノ如シ前エリハ着物狹クテ十分合ハズ体ハ汚レ衣ハ破ブレ…」（北澤[1904b]16）として、常に胸元はテカっていて、前襟は十分に合わさらず、破れている状態であると記している。このような状態であったので北澤は、「故ニ可成泣カセナイ様ニ注意シ他生モ常ニコリテ泣カ

シテハト互ニ少シ位ノコトハ勘辨シテ居リシ…」(北澤[1904b]16)とあるように、教員はもちろん周囲の児童もなるべく泣かせないようにしていたと述べている。

ところが北澤は、対象児の行動について「ソレニ乗ジテ後ヨリ行キテ他ノ生徒ノ背ヲ突キ頭髮ヲ引キ若クハ惡口ヲ云フ」と記しているように、周囲が何もしないのを良いことに他児童の背中を突いたり、髪の毛を引っ張ったり、悪口を言ったりとやりたい放題であったと指摘している。そして「他生マタソンナコトヲスルカト追ヒ行キ逃ケ（「ケ」は「ゲ」の間違いか？）キレナクツカマレバ泣音ヲ擧グ」（北澤[1904b]16)として、我慢の限界に達して他児童が対象児を追い回し、逃げ切れなくなると泣き声を上げるとしている。北澤は、この行為に対する対象児の反応について「一寸デモ臂ヲツカムカ背デモツカルレバサhodノコトナキモ大泣騒ヲナシテ販ルアレバ道ニ遊び居リテ惡口ヲ云ヒ或ハ自家ノ附近ニ要シテ棒ナド持チ他生ヲツキ又ハ土塊ナドヲ投シテ逃グ之ヲ責ムレバ泣クソシテエーオラウチヘ行ツテオトツサマニマ子（「子」は「ネ」の異体字）テクレルハ…」(北澤[1904b]16)と示している。具体的には、次のように指摘されている。1つ目は、他児童の胸や背中をつかんで余程のことがない限り泣き止まずに無断帰宅することである。2つ目は、遊んでいるときには相手の悪口を言ったり、自宅の近くから棒などを持ってきて相手をついたり、土の塊を投げつけて逃げたりすることである。3つ目は、これらのことを責められたときは泣いて帰宅し父親に言いつけることである。保護者の対応について北澤は、「其子ノ父母モ亦其子ノ言ヲ信シ他生ニ道ニアヘバナゼオラアレ（泣ク子）ヲ◆カセタ等云ハル」（北澤[1904b]16)と示しているように、対象児を信じて他児童を叱責するというを行っていたと述べている。また、このような事態に「他生モ大概ノコトハ勘辨シテ構ハズオキ其泣ク子ノ父母ニ告グレバオラアレハ惡イコトハナイガオ前タチカマウカラ惡イト云ハレ又其父母ハ泣ク子ニ向ヒイツデモ泣ケバ吾<sup>ワタシ</sup>ハヨイ子ダ明日又カマツテ他生ヲ叱ツテクレルナド云ツテ居ル故ヨイ氣ニナツテ私ラニワルサヲシマス（「繰り返し記号」が脱落か？）ノボセ上ツテキマス……」（北澤[1904b]16)というように北澤は記している。これは、①対象児の言い分で、他児童が何も悪いことをしていなくても「からかいなどをして関わったことで泣いた」と一方的に注意すること、②対象児が泣けばなだめて当日ではなくても他児童を叱責すること、という両親の具体的な言動について述べている。だから周囲の皆が我慢しているのをよいことに、対象児がいい気になって行動がエスカレートしていると北澤は指摘している。一方、他児童の行動について北澤は、「如何ニモ憎クソーニ學校ニ來リ其兒童ノ來ルヲ見レバ予ニ告ゲタルコトモアリシ」（北澤[1904b]16)として、対象児が登校するのを見ると悔しそうに北澤に告げることもあったと記している。

このような対象児の行動について北澤は、「之ニツキ其他生一般ニ及ボシタルハ予ガ赴任前ヨリ近隣ノ子供ガ喧嘩ヲナスアレバ其父母兄弟等ガ出テ云ヒ合ヲナセシコトニテタ方或ハ日曜日ナドニハ親兄弟ガ出テ子供トノ喧嘩サヘアリシコト數次義理ノ親分子分ナドノ間柄ニテサヘソレガ爲メ惡シカリシコトヲ見受ケタリ（悉皆ニハアラズ）」(北澤[1904b]17)と記しているように、保護者の対応が問題であると見ている。具体的には、対象児が近所の子どもと喧嘩すれば家族が出てきて代わりに話をつけるなどといったことを見かけたことが多くの人にあると指摘している。北澤は、「故ニ生徒等校庭ナリ校内ナリ泣クコトアルヤ直ニ其母兄姉妹ナド出テ來リ何シタドーシテ泣ク等云フ者アリシヨリ兒童ニヨリテハ泣ケバ理ノ當否自分ノ惡シキニ係ハラズ家庭ニ販ルモノ往々アリシ此ノヨク泣ク子ハ其最タルモノナリシ」（北澤[1904b]17)と示すように、学校で泣くことがあれば家族などが来校して詰め寄ることがあり、対象児本人も泣いた理由が自分の悪いことかは関係なく自宅に帰ってしまうことが多いと述べている。北澤は、家族などが出てくることについて「(前略)少シ泣ク子供ノ喧嘩ニ親兄弟ナドノ出ルノハヨロシカラズ却テ子供ヲ我儘ニシ親ヤ家庭ノ威ヲ借ル様ニナルカラト再三云ヒ聞カセリ」（北澤[1904b]17)として、家族が子どもたちの喧嘩に出てくることは、親などの権威を借りて決着を付けることになり、かえって本人をわがままにするだけだと言いつけたと記している。また北澤は、この状況を「是ヨリ斯ル兒童アレバ上級生ハ虎ノ威ヲ借ル狐ナドト忽チ讀本中ニ學ビタルコトヲ應用セリ」（北澤[1904b]17)と示すように、対象児のことを国語科で学習した「虎の威を借る狐」の諺の実用例として用いていたと指摘している。そして家族への注意は、「ソレヨリ幾分ハ出デ來ルモノハ減ジタリ」（北澤[1904b]17)と記していて、以前よりもその回数が減少したと説明している。しかし北澤は、「泣テ家ニ歸ル者ハ依然トシテ前ノ如シ近隣ノ兒童皆此弊風甚シキヲ以テ全般ニ及ハ（「ハ」は「バ」の間違いか？）バ教養上大ニ困難ニ至ラン今ニシテ此惡弊ヲ矯正セザレバ他日如何ナル事ニ及ホ（「ホ」は「ボ」の間違いか？）スヤモ計ラズ」（北澤[1904b]17)と記すように、対象児は相変わらないので周囲の子どもたちがこの弊害に巻き込まれ、一般生活の上で困難が生じると指摘している。だから北澤は、この悪癖を改善する指導を行わなければならないが、どのようなことを行えばよいか苦慮すると述べている。



### 3 悪癖の改善指導

#### 3. 1 最初の改善方法

悪癖行動の方法について北澤は、「就テハ是非之ヲ矯正セント思ヒ一般生徒ニ修身時間又ハ泣テ歸家スル兒童ノアリシ際ニ遊び戯ムレ或ハ其他ノコトニテ泣クアルモ少シ位ノコトニテ歸家スベカラズ歸家セザルベカラザル程ノヲアレバ予ヨリ飯ルベク命ジ若クハ友ダチナリ使ナリニ送り飯ラスルニ由リ以后決シテサホドニ痛クモ苦シクモナキニ直グ泣キ歸ルベカラズ…」(北澤[1904b]17)と示している。この方法は、一般の児童に対して遊んでいる時や他の事をしている時に対象児が泣いたとしても、少しのことでは帰宅させないことを指導している。また対象児には帰宅してしまうほどのことがあった時には、教員(北澤)から帰宅を命じて付き添いを付けて帰宅させるので、今後はあまり苦痛を感じなければ無断で帰宅することはやめなさいと指導している。北澤はこのように指導を行ったが、「約束シ且訓諭シ若シ然ラズシテ無断歸リシモノハ來週ヨリ家庭ノ者ニ連レテ來テ貰ハサ(「サ」は「ナケ」の間違いか?)レバナラズ是マデノ如ク泣ク度毎直ク(「ク」は「グ」の間違いか?)皆歸家シテハ學校ニテモ都合アシク又汝等ノ爲メモ宜シカラズ」(北澤[1904b]17)と示しているように、それでも無断で帰宅したら保護者などに学校まで連れて来てもらうという措置を採るとしている。この措置について北澤は、学校側も無断帰宅するごとに連れて来てもらうのは都合が悪く、対象児にとっても良くない行為であると指摘している。更に北澤は、「此事父母長上ニモ家庭ニ歸ラバヨク話シ置ケバ十分訓諭シ次週ヨリ断然決行スト告ゲオケリ」(北澤[1904b]17)と記していて、措置について保護者や家族に話をした上で毅然として実施することを告げたと述べている。この方法を採用すると「愈々次週ニ至リ今日ヨリ前週ノ約ノ如クセント云ヒ聞カセ且ツ十分監護セシ故カ當日ニ泣クモノナカリシ(之レ甚泣ク兒童アレバ何ノ爲メ泣キシカヲ教師ヨク知り置カザルベカラザルヲ以テナリ)」(北澤[1904b]17)と記すように、対象児に言い聞かせて且つ十分に見守りなどをした結果、教員が把握している範囲においてこの行為が無くなったと北澤は指摘している。

この対応について北澤は、次のような対象児を含む周囲の実態を示している。1つ目は、「他生休ミ時間ニ校庭ニテ云ハク昨日オレニ貴公ハ口ヲキイタゾコノ頃先生カラ云ハレタバカリデハナイカマダ口ヲキカト云ヒシ」(北澤[1904b]17)と示すように、周囲の児童が対象児の暴言を注意し始めたとしている。2つ目は、「其泣ク子口ヲキキヤシ◆誰タヲ呼バツタダウソコケ(中略)他生アンナニ口ヲキイテマダソンナコトヲ云フカト云ヒツ、進ミ行ケバ逃ゲントスルヲ逐ヒ背ヲツカマヘシト思フヤ大泣噪ヲ上ゲエー家ヘ行ッテマ◆テ呉レルハ…」(北澤[1904b]17)と示しているように、暴言を言った言わないと言い合いになって、遂に対象児が他児童の背中をつかんだと思うと大泣きしてさわいで無断帰宅して失敗に終わったとしている。3つ目は、「予ノ少シ待ツベシ云々ヲモ聞入レズドンドン泣キ飯リ他生ノマー待テソンナコトデ泣キ飯ルナドアルモノカト引キ止ムルヲ振り放チ泣キ飯レリ」(北澤[1904b]17-18)と記しているように、教員(北澤)の忠告も聞き入れずに泣いて帰宅しようとし、周囲の児童の引き止めにも応じない状態になったとしている。北澤は、この状態を見て「他生一般ニ先生ノ言ヲ聞カズシテ彼ノ如ク飯ルモノハ再三再四注意シオキタル如ク家庭ノ者ニ連レテ來テ貰ハナケレバナラヌ」前ニ言ヒ置キタルガ如クス諸子ハ泣キテモ無断飯ルナドスベカラズト云ヒオケリ」(北澤[1904b]18)と記すように、大泣きしてそれでも帰宅する者には何度も注意・指導を行うとして、その時には保護者などに連れて来てもらうことになり、このようになる前に泣いても無断で帰宅することは許可しないと全児童に言い聞かせたと述べている。

必ず保護者が学校へ連れて来る決まりについて北澤は、「一組位ノ受持トハ異リ單級補習二三年迄モ置カル、學校ナラバ中々忙ハシク其マ、措キシ常置小使ニテモアルナレバ其學校ニテハ斯々ノ次第ニツキ家庭ヘ誰カ連レ來ルベク云ヒヤルベキナリシ」(北澤[1904b]18)と記して、単式学級だけの受持とは異なって、学校内の組織が複雑多岐になっていても常に用務員がいれば保護者が連れてきても対応できると指摘している。しかし北澤は、「之レナキヲ以テ近隣ノ生徒ニ今日學校ニテハコレノ次第トノコトヲ其生徒ノ家庭ニ話サシメシノミ」(北澤[1904b]18)と指摘するように、用務員がいない学校ではあまり対応できないで終わってしまうと述べている。北澤は、このようであれば「家庭<sup>ウチ</sup>デ叱ラレテ學校ヘ行クト云ツテ道具ヲ持テ學校ヘ來タヨ一風ヲシテ晝頃ニナレバ他家ノ時計ヲ見テ只今ト云ツテ帰リマシタト告ゲルアリ」(北澤[1904b]18)として、保護者に叱られた時に学校へ学習道具を持って登校するふりをして、時間を見計らって昼頃になったら嘘をついて「ただいま」と言いながら帰宅する者がいるかもしれないと指摘している。この事態になったら「一層ノ悪路ニ入ルコ(「ト」の脱落か?)ハ容易ナラズ予過テリ(原文通り)ト心ニ自問自答」(北澤[1904b]18)と記しているように、もっと悪い方向に向かってしまうのは容易だと北澤は自分に言い聞かせたと述べている。したがって北澤は、「全日臨時小使ヲ呼ビ學校ニテ訓練上ナス所ノ次第大要ヲ其家庭ニ話サシメ誰ニテモ明日ハ連レテ出校スベク云ヒ遣レリ使飯リテノ言全使ノ先方(其泣ク子ノ家庭)ニ至リ云ヒタリト云フハ…」(北澤[1904b]18)と示しているように、指導の一環であることを保護者に話して、付き添い

をして連れて登校するようにと臨時の用務員に依頼して、対象児の家へ行って伝えたとしている。

家庭を訪問したところ、保護者から「…私モ學校ノソバヲ毎日皆ノ子供ノ習フ様子ヤ遊び噪グ風ヤ先生ノ教ヘラレル様子如何ヲ知り居ルガコチヲノ息子ホド少シ位ノコトニ大泣噪キヲスルハナシ斯克云ハ、大ニ立腹サル、カ知ランガ私ノヨーナ者ダデ云フガ…」(北澤[1904b]18)として、小学校のそばを毎日通って児童の学習風景・遊び騒いでいる風景・教員の授業風景などを見て、息子（対象児）だけが少しくらいのことでただ大泣きをして騒ぐことをするように言われるのはとても腹立たしいことであると言われたと記している。これに加えて「…コチヲノ兄弟共モ皆學校今ノ先生ニ教ツテ知ツテ居ルダローガ決シテ無理ナコトヤ……ヒドヒコトヲサル、様ナ事ナシ…」(北澤[1904b]18)と示して、対象児の兄や姉も小学校で教わっているが、無理なことやひどいことは決して言わないと知っていると記している。また保護者が「…明日ハ連レテ行カツシヤルガヨイソレデモ若シ氣ニ入ラヌ事アルト思ハレナバ學校ヘ話シニ來ルナリオコリニ來ルナリシテ呉レルガヨイヨクワカル様ニ話シヤルカラト先生カラ云ハレマシタ然シコチヲモ幾分人ノ事モ話シヤリ口モキテヤル程ノソチヲマサカソナコトモアルマイタトヒ云ツチ行ツタカラトテ他ノ皆ノ子供初メ親タチモコチヲヨイトハ云ハンマイ私ハ使ダケノコト、思フダケノコトヲ心安ダテニ遠慮ナク云ヒマシタマー明日連レテ出サツシヤイ…」(北澤[1904b]18-19)という主張をしていたと北澤は記している。これは、一緒に学校へ連れて行くからもし気に入らないことがあれば話し合いなどに来てくださいと伝えたと記している。そして「…其父云フニハ泣テ歸ツテ來タナシ云フカラ叱ツテ行ケツト云ツタラ本ヲ抱イテ出テ行キ晝飯ニハ皆ト一所ニ飯ツテ來ルカラ其マ、行クコトト思ツテ構ハズオイタ」(北澤[1904b]19)と示すように、父親の言うには泣いて帰宅してきたから叱ったら、本を抱えて出て行って皆と一緒に昼飯頃に帰ってきたので、そのまま学校に行ったと思ったとしていた。そこで父親が「奴息ソレジヤ虚言ツテ遊ンデ居タナ……ソレジヤ明日兄（泣ク子）ノミデモ連レサシテ……云々ト其翌日兄ニ連レラレテ出校由テ其兄ニ泣ク子ノ學校ニオケル有様所置云々ヲ談セシ」(北澤[1904b]19)として、嘘をついていたと考えて学校へ連れて来られて学校での様子を話し合ったと記している。ただ北澤は、「私ハ先生ニモ長ク教ヲ受ケ決シテ今ノ先生ハオラモ教ツテ覺エアルガヒドイ事ヤムリナコト等云ハルコトナシ」(北澤[1904b]19)と記しているように、父親が教員（北澤）をひどいことや無理難題を言わないのは分かっていると述べたとしている。その上で「全体オラアレハイツデモ他生ニ口ヲキイタリアマリ泣クカラダト申セバワレハ人ノ子ニヒイキシテ自分ノ兄弟ヲ悪ク言フナド云ハルハ、」(北澤[1904b]19)として、周囲の児童に暴言を言ったりすぐに泣くと言われたりすることで、他の子どもたちをひいきして自分の子どもたちを悪く言うことに納得していない父親の様子が示されている。北澤は、この続きとして「親デアルカラ其ノヨーニ云々ヲイフニモナラズシマスガアレガワルイコトハ十分知ツテ居リマスカラ叱ツテ教ヘテ下サイ云々…」(北澤[1904b]19)と記していて、この不満を口に出すことはいけないと十分承知していて、北澤に適切な指導を行ってほしいとした父親の葛藤も示している。

### 3. 2 新たな指導方法

北澤は、このように保護者との意見の相違が見られたものの理解してもらい、「是非泣テ歸ルノヲ矯メテヤル積リ然ナクテハ學校ニテモ他生一般ニ及ボシテ不都合少カラズ其生徒將來ノ爲メニモ宜シカラザル」(北澤[1904b]19)と示しているように、学校や児童全体に様々な問題を引き起こすため、なんとしても泣いて帰宅する行為を改善した方が良くと指摘している。また北澤は「此ノ后モマガ泣キ歸ルコト數回アラン其都度誰ニテモヨイカラ一寸學校マデ連レテ來ラル、様父母ニモ十分話シオキ呉レヨ（他生モ皆ソノ通り故）…」(北澤[1904b]19)と示しているように、その後も泣いて無断帰宅を繰り返したため、他の児童の場合も同様だとして無断帰宅したときは必ず誰かが学校に連れて来るようにと保護者に十分お願いをしたと記している。様々な対策をしても「其后二日許リノ後又少シノ事ニ泣キ他生ノ引キ止ムルヲ聞カバコソ大泣噪ヲシテ歸レリ全生ノ姉連レ來ル」(北澤[1904b]19)というように、無断帰宅した2日後に少しのことで大泣きして他児童にも引き止められたが帰宅して姉に連れて来られたと北澤は記している。しかし北澤は、「此時ハCOND泣キ歸レバコソ次ハ父カ母デナケレバナラヌガ父母ガ連レテ來ラル、(後略)」(北澤[1904b]19)というように、次回無断帰宅した場合には保護者が連れて来なければならないと指導したとしている。北澤はこの理由について、「是迄ノ兄サンヤ姉サンニ連レテ來ラル、トハチガヒ必ズ父ヤ母ガ連レルニハ人ニモ耻シイカラ叱ラレン其ノ様ナ事ハ父母ニ對シテモ子トシテ濟マス事ナリ」(北澤[1904b]19)と記していて、兄や姉の時とは違って必ず保護者が連れて来なければならないということは、親にとって恥をかくことになるため適切に叱ると言うことが双方にとって良いことになる旨を指摘している。一方で北澤は、「コノヨーナ事ニテ度々連レ來ラル、ノ宜シカラザルヲ諷セリ」(北澤[1904b]19)として、何度も学校に連れて来られても困ると述べている。

次の対応として「三四日ノ後又泣テ歸ル他生アー又泣テ歸ル先生ーサンハ又飯ツテ行マス……トサケビ其中一二ノ◆◆生行ツテ引キ止ムルアレバ尙更歸テ行カントスルノ狀ヲナス由テ構ハズ措クベシ」(北澤[1904b]19)と記して

いるように、3～4日たって他児童が泣いて帰宅する対象児を見て「また帰宅しています」と叫んで、引き留めようとするがさらに帰宅しようとする状態であったと述べている。北澤は、「其様ニ行キタクハ行ケツト構ハズオクベシト云ヒシニ他生モアマリ聞カザルヨリソナニ行キタクバ行ケト推スカ如クニスレバアトジサリシ來ルカ如シカマハズオキシニ家ニ歸リ行ケリ」（北澤[1904b]19）として、教員の注意も他児童の引き止めも聞かないので自由にすれば良いと突き放すと、後ずさりをするような素振りを見せて帰宅したとしている。その後の状況について北澤は、「次ノ時間直ク（「ク」は「グ」の間違いか？）其親戚ノ叔父ナル人來合セ居タリトテ校庭マデ連れ來リ頼ミ行ケリソノ時ハ授業中ナリシテ以テ直ニ入レテケイコヲナシ時間后訓誡シ歸セリ」（北澤[1904b]19）と記していて、対象児の叔父に連れて来られたが両親ではないため、これを指導・注意して帰ってもらったとしている。北澤は、何回繰り返してもそれでも「ソレヨリ五日間許リノ後又泣キ歸ラントセリ」（北澤[1904b]19）と示しているように、泣いて帰宅しようとしたと述べている。この行動に対して周囲の児童の反応を北澤は、「他生中ヤー又泣テ行ク留メロ行クナナドサケブ者アリ或一生ソナニ行カ子（「子」は「ネ」の異字体）デオケ又連レテ來テ貰ラハナクテハナラナイジヤナイカト引き止メントスレバ尙更行カントスソレヂヤー行ケト推シタル（中略）」（北澤[1904b]19-20）であったと記している。具体的には、次のようなことを行っている。1つ目は、泣いて帰宅するのを止めろと叫んだ者がいたとしている。2つ目は、そんなに帰宅したければ行かせておけと静観する者がいたとしている。3つ目は、再び連れて来てもらわなければならないからと言って引き止めるとなおさら行こうとし、それでは帰れば良いという者がいたとしている。このような対応をされた児童について北澤は、「ジタバタシテハ居ルガ行カズシテ却テアトジサリシ來ル様ナリシモマダ中々命令ナド聞入レサルヲ以テナホソノマ、措ケリ」（北澤[1904b]20）として、その場でジタバタしていて指導などを聞き入れない状態を示したと記している。また母親の対応について北澤は、「ソレニテ泣キ販リシガ其母山畑ニ行ク際ナリトテ學校ソバマデ連れ來リシ當日時間后留置此ノ后ハ誰ニツレテ來テモラハント思フカ」（北澤[1904b]20）と示して、それでも泣いて帰宅したときに母親が忙しく、学校のそばまで連れて来るのみであったため、決まり通りきちんと学校まで誰かに連れてきてもらわないといけないと考えていたとしている。その上で北澤は、「此次ハ父デナケレバナラスガ若シ父ガ連レテ來ルヲニナレバ父モ耻シイカラ必ズヤ汝ハ大々叱責セラル、ナラン此ノ後ハ泣キ直ク（「ク」は「グ」の間違いか？）販ルナドノコトラスベカラズ（此時他ノ學科中成績佳良ナル点モアゲ自覺セシメタリ）ト懇々訓諭セリ」（北澤[1904b]20）として、このまま続けるならば今度は父親でなければならないとしている。そして北澤は、父親が連れて来ることになれば父親も恥ずかしいから、すぐ怒られるはずだから泣いて帰宅することをしてはならないと対象児に言い聞かせている。加えて北澤は、この時点で各教科の成績は佳良であることを自覚させて、じっくりと指導を行ったと述べている。この結果、「コレヨリ泣ク度數大ニ少クナリタトヒ泣クコトアルモ歸ラナクナリ泣ナガラ歸家スル風ヲ装フモ他生サー行カナイデオケト云ヘバ泣ナガラズン〜校内ニ入り來リ予ガ言ヲ聞キ歸ラヌ様ナリシ」（北澤[1904b]20）と記しているように、①泣く回数が減少した、②泣いても帰宅することがなくなった、③泣いて帰宅するような素振りでも周囲の児童に引き止められると泣きながら校内に入って言うことを聞くようになった、というように変化したと北澤は指摘している。さらに北澤は、この指導及び注意が功を奏して「從テ他諸學科モヨク進歩セリ」（北澤[1904b]20）とも指摘している。このように対象児の行動の変化について北澤は、「コノ間他生ニハ一名モ泣キ歸ル等ノ者ナク又互ニ泣キ合フ様ノヲモ少ク餘程ノコトアルモ泣カズ泣クアルモスグダマルコトニナレリ」（北澤[1904b]20）として、無断帰宅する児童は1人もいなくなり、余程のことがない限り泣くことがあっても黙るようになったと記している。

北澤は、悪癖とされるよく泣く児童が改善したことで「此レヨリ學校生徒一般及其他父兄ニ至ルマデ余程ノ刺戟劑トナリシモノカ近隣子供ノ喧嘩ニ親兄弟ノ出テ口論ガマシキモノ又我儘極マル兒童モ管理上訓練上ニモ自然都合ヨク此一事ニテナリタルヲ自分ナガラアヤシミタル程ナリシ」（北澤[1904b]20）と示していて、一般児童と保護者たちにとっても良い教訓となったのか、子ども同士のけんかに大人が口を挟むようなこともなくなり、わがままな性格の児童に対する指導にも効果をもたらしたと述べている。

上記の方法について北澤は、「後日ニ至リ當時施シタル方法手段ノ良否如何ニ付テハ或ハ手緩キアリ或ハ過テリト思ヘルアリ或ハ家庭トノ聯絡ノ点ニ於テ欠クル所アリ其外方法ノ拙ナリシヲ覺リタル点少カラズ」（北澤[1904b]20）と記しているように、実際に行ったものの可否を一度検討する必要があると指摘している。また北澤は、保護者の意識について「該父母ハ喜ブナラント思ヒノ外コノ矯正ヲ以テ余程恥シキコトニ思ヒ却テ予ニヨカラザル感情ヲ抱キシモノ、如カリシ（原文通り）」（北澤[1904b]20）と示して、行動の改善指導を保護者として喜ぶと同時に、むしろ恥辱を受けたとして私（北澤）に負の感情を抱いてしまったのではないかと指摘している。北澤がこのように思ったのは、「コレ近隣風呂入ヤ井（「戸」が脱落か？）端會議ニ於テ談合ノ際他人ガソチラノ如キ剛情息子デモ先生ニハ仕付ラレルナンデモ子供ハ先生ニ任カスガーバンヨイ中々家庭ノ言フコトハキカ子カラ等云ヒタルモノアリシトノヲモ聞キシカソレヤコレヤデカ」（北澤[1904b]20）と記している。一つは悪癖が改善したことで、子ども



のしつけを教員に任せた方が良くと周囲の人たちに噂を言われるかもしれないと考えた。もう一つは、もしこの噂を聞いたとしたら、保護者がどのような気持ちになるかを心配していた。しかし北澤は、「半ヶ年カー一年許リハ出校セシモ子供ノ話ハマコトニ出サザリキ」（北澤[1904b]20）として、半年～1年経ってもそのような話は耳にしなかったと述べている。

#### 4 悪癖と学力

北澤は対象児の学力について、「其後縣郡視學ノ巡視セラレシアリ」（北澤[1904b]20）というように、長野県及び北安曇郡の教育視察での出来事について記されている。そして北澤は、「其時縣視學ヨリ諸學科ヲ三四年級ニ試ミラレシガ大ニ成績ヨロシク」（北澤[1904b]20）と示して、各教科で県視学が用意した問題を3～4年生に解答してもらったところ、対象児の成績が良かったと記している。各教科については、北澤が次のように述べている。1つ目に算数科（算術）では、「一升九錢ノモノ一升五合ノ代ハ何程ナルカ答十三錢五厘ヲ得」（北澤[1904b]20-21）という問いに対して解答したとしている。この解答の導き方について「如何ニシテ答ヲ得シカトノ問ヒニ一升ハ九錢五合ハ一升ノ半分九錢ノ半分ハ四錢五厘ダカラ九錢ト四錢五厘デ十三錢五厘ノ答ヲ得」（北澤[1904b]21）と、1升が代金9錢で、5合とは半升だから9錢÷2で代金が4錢5厘になって、これを合わせると9錢+4錢5厘=13錢5厘になると対象児が説明したと記している。次に「二升五合ハ何程ナルカノ答モデキ其式ハトノ問ヒニ九錢ハ二倍半ヲカケルナドノ答ヲ得」（北澤[1904b]21）という問いの解答に、9錢に2倍半をかければよいと説明したとしている。2つ目に国語科は、「（前略）漢字及假名ノ書取モ大抵デキ作文モ其時間始メニ小黑板ニ次ノ如キ文ヲ書キオキ黙讀セシメ後讀ミ且ツ講話セシメテ〇〇點ノ如キケ所ヲ應用セシコトヲ教ヘ居タリシ」（北澤[1904b]21）と示されている。ここには、漢字と仮名の書き取りについても解答でき、作文についても黒板に書かれている文を黙読・声に出して読む・その内容を説明することができたと記している。

北澤は、「其翌日ヨク泣キシ子ニ昨日ハ上出来ナリシコトヲ賞メ家ニ販ラバ父母ニ其成績佳良ナリシヲ告ゲコト云ヒヤリタリ」（北澤[1904b]21）と記しているように、県視学による問題の成績が良かったから帰宅したらお父さんとお母さんにこのことを報告しなさいと告げたと述べている。加えて北澤は、「他生モ見口貴公ハコノゴロハアマリ泣テ歸ラナイカラ出来ルヨーニツタオラ組（三年）デハ一バン出来タト賞メテ意氣揚々嬉シカリテ歸リタリ……」（北澤[1904b]21）と示して、泣いて帰宅しなくなったから成績が上がって組の中で一番できたと他の児童たちにも賞賛されて、対象児も喜んで帰宅していったと説明している。そして「以后家庭モ學校及予ニ大ニ同情ヲ表スルモノ、如シ」（北澤[1904b]21）と記して、改善指導の効果があったことで、対象児の家庭や学校から私（北澤）に感謝を表してもらったと北澤は述べている。

対象児の行動改善について北澤は、「（前略）奏效ヲ得シハ該兒童ガ眞ノ魯鈍ニアラズシテ疳癖我儘強キト家庭ノ躰不良ナリシダケト他生中親切友誼ノ者アリシ（後略）」（北澤[1904b]21）と記していて、効果が見られたのは①対象児が本当の魯鈍<sup>2)</sup>ではなかったこと、②家庭（保護者）でのしつけが不完全であったこと、の要因が考えられると指摘している。北澤は、周囲の児童の中で友情が生まれたことを理由して示している。この後について北澤は、「其兄ノ心行ヨク補習三年后マデ教育シタリシトニ由リ最後ニ家庭ヲシテ同情ヲ表セラル、マデニ至リシ」（北澤[1904b]21）として、対象児（史料では「兄」とある。）が補習科3年まで学校教育を受けることができたことと記している。また改善したきっかけについて北澤は、「動機ヲ與ヘラレタルハ當時縣郡視學ノ巡視セラレタル際ニアリテ存ス」（北澤[1904b]21）と示しているように、長野県と北安曇郡の教育行政の視察によって好転したと指摘している。そして北澤は、「斯ル惡癖兒ヲ子ノ愛ニ溺レシ父母ト共ニ幸ニ矯救シテ其初期ノ目的ヲ達シ慰安スルヲ得タリシ（後略）」（北澤[1904b]21）と指摘していて、子どもを大切に思う両親（保護者）と一緒に行動の改善ができたことによって、当初の目的が達成できたと締め括っている。

#### 5 まとめ

本研究は、明治30年代の長野県の通常教育における悪癖を示す児童の実態と指導実践について検討した。その結果、以下の点が明らかになったとともに、今後の課題が示された。

## 5. 1 悪癖のある児童の実情と周囲の反応について

北澤は教場咄に続いて、しばしば泣き出す児童がいたとして、これを悪癖の事象と考えていた。児童の状態に関して北澤は、次のように示した。1つは、他児童に気になることを言われると泣き出すことであった。もう1つは、対象児が他児童に手を出したり、他児童の悪口を言って捕まえられたり、他児童に悪口を言い返されたりすると泣いてしまうことであった。泣くことに関して北澤は、①1日に3回くらい泣いて小学校においても泣かないことが少ないこと、②泣き声が高くて近所20～30戸の家に響き渡るくらいの大きさであることを指摘した。また泣き出している時に、保護者以外の者がなだめるとかえって激しく泣き出し、泣き声だけを聞くと、ひどく厳しい叱責（あるいは体罰）を加えているのではないかという疑いを持たれてしまうと述べた。このような状態から北澤は、一度泣き出すとどうすることもできず、そのままにすると1時間以上泣き続けて無断帰宅するとした。そして対象児が帰宅すると親に甘えて、涙・よだれ・鼻水が一緒になって着物が汚れて身だしなみが良くないと指摘した。だから教員や他児童もなるべく泣かせないようにしたと北澤は述べた。

ところが周囲が何もしないことを良いことに、他児童の背中を突いたり、髪の毛を引っ張ったり、悪口を言ったりとやりたい放題であり、我慢の限界に達して他児童が対象児を追いつけ、逃げ切れなくなると泣き声を上げるとした。この行為に対する反応として、①他児童の胸や背中をつかんで泣き止まずに無断帰宅する、②遊んでいるときには相手の悪口を言ったり、自宅の近くから棒などを持ってきて相手を突いたり、土の塊を投げつけて逃げたりする、③これらのことを責められたときは泣いて帰宅し父親に言いつける、ことを示した。

このような対象児の行動について北澤は、家庭特に保護者の問題が大きいと考えた。具体的には、対象児が近所の子どもと喧嘩すれば家族が出てきて代わりに話をつけるなどといったことであった。北澤はその行動が相変わらないので、周囲の子どもたちがこの弊害に巻き込まれ、一般生活の上で困難が生じ、この悪癖を改善する指導を行わなければならないが、どのようなことを行えばよいか苦慮するとした。

## 5. 2 悪癖の改善指導について

### 5. 2. 1 最初の改善方法

悪癖行動の方法について北澤は、一般児童に遊んでいる時や他の事を行っている時に対象児が泣いたとしても、少しのことでは帰宅させないこと。また帰宅してしまうほどのことがあった時には、教員（北澤）から帰宅を命じて付き添いを付けて帰宅させるので、今後はあんまり苦痛を感じなければ無断で帰宅することはやめなさいと指導した。しかしこの効果が見られないので、それでも無断で帰宅したら保護者などに学校まで連れて来てもらうという措置を採った。ただし北澤は、学校側も無断帰宅するごとに連れて来てもらうのは都合が悪く、対象児にとっても良くない行為であると指摘した。ただし北澤は、措置について保護者や家族に話をした上で毅然として実施することを告げたとした。

指導に関して北澤は対象児を含む周囲の実態を、①周囲の児童が対象児の暴言を注意し始めたこと、②暴言を言った言わないと言い合いになって、遂に対象児が他児童の背中をつかんだと思うと大泣きしてさわいで無断帰宅して失敗に終わったこと、③教員（北澤）の忠告も聞き入れず、周囲の児童の引き止めにも応じないで帰宅しようとしたこと、になったと指摘した。この状態を見て北澤は、無断帰宅する者には何度も注意・指導を行うとして、その時には必ず保護者などに連れて来てもらうことになり、無断で帰宅することは許可しないと全児童に忠告したと述べていた。

北澤は、指導上の決まりなどを説明するために家庭訪問をした際に、息子（対象児）だけが少しくらいのことでただ大泣きをして騒ぐことをするように言われるのはとっても腹立たしいと言われたとした。そこで北澤は、保護者が気になったことがあった時には話し合いを持ち、関係改善を図ったとした。話し合いによって保護者特に父親の不満が大きく、子どもに対する様々な指摘に納得していない感じではあったが、最終的には適切な改善指導を受け入れたと北澤は述べていた。

### 5. 2. 2 新たな指導方法

北澤は保護者からの了承を得て、学校や児童全体に様々な問題を引き起こすため、なんとしても泣いて帰宅する行為を改善した方が良くないと指摘した。前述の決まりを更に徹底しても無断帰宅は収まらず、保護者の代わりに姉や親戚が連れて来たと北澤は述べていた。これを受けて北澤は、保護者が連れて来なければ対応できないと対象児の家庭へ忠告を繰り返した。しかし対象児本人は、泣いて帰宅することをやめようとしなかった。

この状況を見ていた周囲の児童に関して北澤は、①泣いて帰宅するのを止めろと叫んだ者がいた、②そんなに帰宅したければ行かせておけと静観する者がいた、③再び連れて来てもらわなければならないからと言って引き止めると



なおさら行こうとするから帰ればいいという者がいた、とする行動を取ったと指摘した。これらの行動に対し対象児が、その場でジタバタしていて指導などを聞き入れない状態を示したと北澤は述べていた。そして北澤は、このまま続けるならば今度は父親でなければならぬとして、父親が連れて来ることになれば父親も恥ずかしいから、激しく怒られるはずだから泣いて帰宅することをしてはならないと対象児に言い聞かせた。加えて北澤は、各教科の成績は佳良であることを自覚させて、じっくりと指導を行ったとした。

北澤はこのような指導の結果、①泣く回数が減少したこと、②泣いても帰宅するのがなくなったこと、③泣いて帰宅するような素振りでも周囲の児童に引き止められると泣きながら校内に入って言うことを聞くようになったこと、というように変化したと指摘した。北澤は悪癖の児童が改善したことで、一般児童と保護者たちにとっても良い教訓となったと感じた。この理由を北澤は、子ども同士の喧嘩に大人が口を挟むようなこともなくなり、わがままな性格の児童に対する指導にも効果が見られたことにあったと述べた。

この方法に関して北澤は、行動の改善指導を保護者として喜ぶと同時に、むしろ恥辱を受けたとして私（北澤）に負の感情を抱いてしまったのではないかと指摘した。それは、自分の子どもをしつけられないなら学校の教員にしつけを任せるのが一番良い方法だと周囲の人たちの話を聞いたとしたら、保護者がどのように受け止めるのかという心配をした。しかし半年～1年経ってもそのような話は耳にしなかったと述べていた。

### 5. 3 悪癖と学力について

北澤は対象児の学力に関して、長野県及び北安曇郡の教育視察での出来事が悪癖を改善させた要因の一つであったと指摘した。これは、県視学が用意した問題に解答させたものであった。北澤は、算数科について解答とそこまでの導き方を説明することができ、応用問題に関しても同様に説明できたとした。また国語科に関しても漢字及び仮名の読み書きや、文章の読み及び内容の解説などをきちんと答えることができたことと北澤は述べていた。

対象児の成績に関して北澤は、帰宅したらお父さんとお母さんにこのことを報告しなさいと指導した。加えてこれは、泣いて帰宅しなくなったから成績が上がって組の中で一番できたと他の児童たちにも賞賛されて、対象児も喜んで帰宅していったとも指摘した。

対象児の行動改善について北澤は、①対象児が本当の魯鈍ではなかったこと、②家庭（保護者）でのしつけが不完全であったこと、の要因が考えられると指摘した。その後、対象児が補習科3年まで学校教育を受けることができたとした。最後に北澤は、子どもを大切に思う両親（保護者）と一緒に行動の改善ができたことによって、当初の目的が達成できたと締め括った。

### 5. 4 今後の課題

今後は、明治時代の長野県教育における児童の疾病状態や精神状態に関する研究を通じた教育実践などを明らかにすることが課題として残された。

## 注

- 1) 「旧・筑摩県」は、中信地域（長野県の西側）・南信地域（長野県の南側）と岐阜県飛騨地域（岐阜県の北側）が1871（明治4）年に合併して誕生し、現在の松本市に県庁が置かれた県である。そして1876（明治9）年には飛騨地域を分離させて、北信地域（長野県の北側）・東信地域（長野県の東側）を範囲とした旧・長野県と合併して現在の長野県が誕生した。
- 2) 「信濃教育会」は、長野地域の教職員有志が集まって1884（明治17）年に「長野教育談会」を発足したのがこの前身である。その後、全県組織になって名称変更され、現在まで至っている（信濃教育会、1979）<sup>5)</sup>。
- 3) 機関誌は、1886（明治19）年に『信濃教育會雑誌』として発刊（毎月発刊）され、1907（明治40）年に『信濃教育』へと改名して現在まで続いている。
- 4) 北安曇郡は、新潟県と富山県に隣接した長野県の北西部に位置した郡である。現在は、小谷村・白馬村・松川村・池田町で構成されている。またこの論文時は、大町市を加えた範囲であった。
- 5) 「魯鈍」とは、広辞苑によると「①おろかでにぶいこと。②医学で、精神遅滞のうち程度の最も軽い状態を言った語。軽愚。」とある。

## 謝辞

本研究に関して安曇野市中央図書館の皆様には、史料の複写など多大なご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

## 文献

- (1) 中嶋忍・河合康（2006）長野県松本尋常小学校の「落第生」学級に関する史的研究－「落第生」学級の設置・廃止の経緯と成績不良の考え方について－. 発達障害研究, 28, pp.290-306.
- (2) 中嶋忍・河合康（2018）長野県における劣等児に対する取り組み－松本尋常小学校の場合－. 中村満紀男（編著）日本障害児教育史（戦前編）. 明石書店, pp.248-259.
- (3) 北澤大吉（1904a）悪癖児童矯正実験談. 信濃教育會雑誌, 第二百十六號, pp.20-27.
- (4) 北澤大吉（1904b）悪癖児童矯正実験談（續）. 信濃教育會雑誌, 第二百十七號, pp.15-21.
- (5) 信濃教育会（1979）－ 信濃教育会 創立前史及び創業時代. 信濃教育会（編）信濃教育会の歩み. 信教印刷, pp.5-28.

# A Historical Study of How Children with “Bad Habits” Were Educated in Nagano Prefecture, Japan During the Meiji Period: Guiding Children Who Cry Frequently

Shinobu NAKAJIMA\* and Yasushi KAWAI\*\*

## ABSTRACT

This study intended to elucidate the actual conditions of children who exhibit “bad habits” as well as guidance practice for such children in ordinary education in Nagano Prefecture, Japan, during the period 1898–1907. It examined guidance methods for children who cried frequently, focusing on three points based on Daikichi Kitazawa’s *Akuheki jido kyohei jikkendan* (“Experiments in correction of children’s bad habits”): (1) the actual conditions of children who display “bad habits” and the response of those around them, (2) guidance for reducing “bad habits,” and (3) “bad habits” and academic ability. The findings are as follows: (1) Children developed the “bad habit” of frequent crying for various reasons. (2) When things go against their wishes, they cried uncontrollably and left school without permission. (3) As much as possible, those around them would try to avoid making them cry. (4) Reasons for frequent crying included guardians’ interference during arguments among children and incomplete discipline, such as overindulgence at home. (5) In the first guidance, guardians were asked to ensure that they brought the children back to school if they went home without permission. However, since the children were accompanied back to school by their siblings and relatives, their “bad habit” was not reduced. (6) Guardians were unconvinced when told that it was only their children who had this issue. (7) Despite this, when it was explained to them that classmates and others were also being affected, the guardians consented to guidance. (8) The second guidance was provided by attentively building the children’s self-confidence by telling them that their grades were good and warning them that if they went home again without permission, their fathers would be asked to bring them back. This guidance led to reduced “bad habits.”

---

\* independent    \*\* Clinical Psychology, Health and Special Needs Education